本郷逕子先生のご退官によせて

水谷信子

本郷先生にはじめてお会いしたのは三鷹の国際キリスト教大学の構内であった。そのとき先生は学部の学生、わたしは助手で、あまりゆっくりとお話ししたことはなかったが、そのころの先生の清楚な、妖精のようなお姿がいまでも脳裏にやきついている。

それから三十年余の年月が流れ、十数年前、浅井先生の研究室で先生と再会、その後、お茶の水女子大で十年間ごいっしょに仕事をすることができた。その十年間はわたしにとってほんとうに楽しい年月であった。数十年の空隙がうそのように、仕事のこと個人的なことなど、少なくともわたしの側からはうちとけて何でもお話ができ、ご相談ができた。夜を徹して講義の準備をされたお話を伺って、なまけものの自分が恥ずかしくなったり、めずらしい海外のお話などに時を忘れたりした。なつかしい貴重な時期であった。今は浅井先生も大学を去られ、今回、先生も去られるという現実には、感傷をさそわれざるを得ない。

先日、国際キリスト教大学の前を通ったとき、正門から教会につづく長い道を見ると、かつてほっそりとたよりなげだった桜の木が大きく育ってがっしりと両側から枝をのばし、みごとな若葉のトンネルを作っていた。ここではじめて先生にお会いしたころのことを思い、その後数十年を経て再びお会いして、わたしの母校であるお茶の水女子大で十年間おつきあいさせていただいたことを思って、世の中ははかないようでけっこう長い経験もできるものだと妙に納得したのである。

先生がお茶大を去られるのはまことにさびしいが、今度は少しは時間の余裕もおできになることであろう。これからはご迷惑でもお邪魔したりお呼びだししたりして、ウイットあふれるお話をゆっくり伺いたいと楽しみにしている。